ホルムズ海峡に面したムサンダム半島北端の歴史を紐解く
―オマーン、ブハ地区における遺跡分布調査(2024年)―

近藤　康久　総合地球環境学研究所教授
黒沼　太一　東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所助教
田邉幹太郎　東京大学大学院人文社会系研究科博士課程

Exploring History of Northern Musandam Facing Hormuz Strait: Archaeological Surveys in the Bukha District, Oman in 2024

KONDO, Yasuhisa　Professor, Research Institute for Humanity and Nature
KURONUMA, Taichi　Assistant Professor, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies
TANABE, Kantaro　Doctoral student, Graduate School of Humanities and Sociology, The University of Tokyo

1. はじめに

ムサンダム地方は、アラビア半島の南東部からホルムズ海峡に突き出た半島状の一角である。その北端に、オマーン領の飛び地、ムサンダム特別行政区がある。特別行政区が位置するムサンダム半島の北端部(以下、ムサンダム北部)は、ハジャル山脈が海峡に沈み込んで複雑なリアス式海岸を形成しており、近年まで陸路での交通が困難であった。ホルムズ海峡が海上交通の要衝であることに加えて、陸続きでアラブ首長国連邦(UAE)、海峡をはさんでイランとそれぞれ接しており、さらに最近は沖合で石油・天然ガスの開発が進むなど、まさしく地政学上の要地である。

半島の北端から対岸のイラン領ケシュム島までの直線距離は約60 kmであり、現在でも小型船舶による往来がある(Benz 2013)。また、ムサンダム北部にはイラン系の少数言語であるクムザール語の話者が居住する。古来より、イラン(ペルシャ)とアラビア、そして環インド洋世界との文化交流の舞台であったことは想像に難くない。

しかしながら、ムサンダム北部の考古学調査は、UAEシャルジャ首長国及びフジャイラ首長国に接する東岸のダバ・アル＝バヤア(Daba al-Bayaah)遺跡(Genchi 2023)を除けば、1960年代にベアトリス・ド・カルディ(de Cardi and Doe 1971)、90年代にパオロ・ビアジ、2008年にジェフリー・ローズ(Rose 2008)らのチームが遺跡分布調査を散行したにとどまり、地域文化の考古・歴史的な全体像は未だに明らかでない。そこで筆者らは、ISTIDAMAプロジェクト(黒沼他 本号)を拡張して、ムサンダム北部の悉皆的な遺跡分布調査に着手した。以下、初年度となった2024年3月の調査成果について報告する。

2. 2024年遺跡分布調査の概要

2024年3月6日から8日にかけての3日間、近藤と黒沼がムサンダム北部の中心都市ハサブを拠点として遺跡分布調査を実施した。ハサブから西海岸は、UAEラアス・ル＝ハイマ首長国に続く海岸道路が整備されたが、北端のクムザール地区と東海岸にアクセスするにはモーターボートかヘリコプターが必要で、現地協力者によればハサブより南方の山間部は道が悪く自動車でのアクセスが困難ということだった。そのため、自動車でのアクセスが容易な西海岸のブハ県にフォーカスして、調査を実施した。3日間の調査により、北から順にブハ(Bukha)、グムダ(Ghumdah)、ティバート(Tibat)の3地区で、合わせて10か所の遺跡を確認した(**図1**)。

3. 鉄器時代の石積墓

ブハの市街地南縁の段丘上に、石積墓群を確認した。この墓群は、ローズによる調査(Rose 2008)でBUK05遺跡と認定されているものと同一であるため、この名称を踏襲した。BUK05遺跡は低位のA地点と高位のB地点からなる。

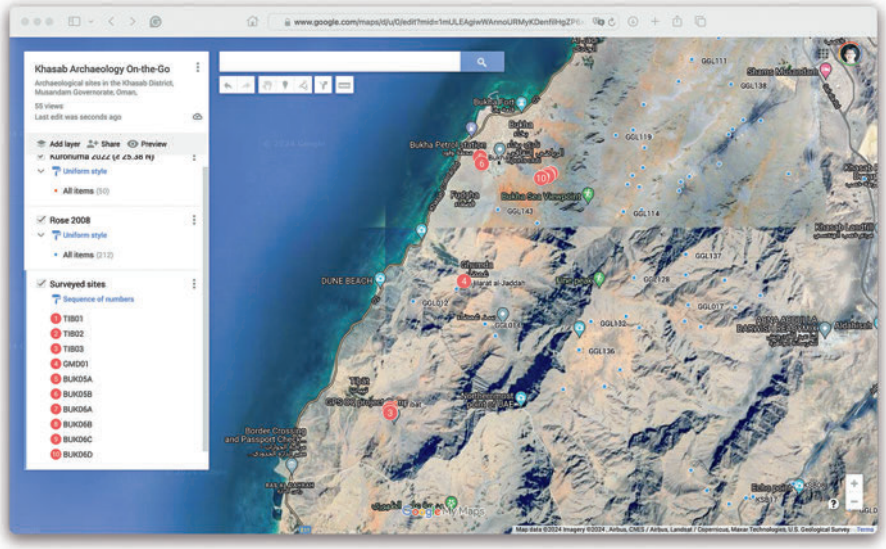

図1　ブハ地区にて筆者らが踏査した遺跡（番号付きの点）と、Rose 2008 所収遺跡（番号なしの点）。

図2　BUK05-02 号石積墓（北東より撮影。撮影者：黒沼太一）。右奥に 01 号石積墓が隣接する。

図3　BUK06 遺跡 B 地点のワアブ様遺構（近藤康久が撮影した GoPro 動画よりクリップ）。

A 地点は一対の楕円形の石積墓からなる。1 号墓は保存状態が良く、長径約 3.1 m、短径約 2.8 m で、現存高は 1.25 m である（**図 2 の右**）。長軸は現在の磁北から 8 度東に振れている。墓は明灰色の板状の石材の間に小石を充填する形で構築されている。長軸方向の南端に幅 50 cm、高さ 45 cm の出入口があり、内部には幅約 65 cm の空間がある。外壁の厚さは最大 90 cm である。1 号墓の東側に連接する 2 号墓は、切り合い状況から見て 1 号墓よりも構築時期が下る。長径 2.6 m、短径 1.6 m の楕円形をしており、現存高は 0.6 m である（**図 2**）。長軸方向は北北東 22 度である。1 号墓と同様に明灰色の石材で構築されている。出入口は確認できなかった。

A 地点から小谷を挟んで東側の段丘面に位置する B 地点でも、同様に 4 基の石積墓を確認した。南東アラビアでは、石積墓は円形の平面形状を持つ前期青銅器時代ハフィート期（紀元前 3300 年頃～前 2700 年頃）のものがよく知られているが、今回確認した一群の石積墓は、楕円形の平面形状の横長の墓室を有する前期鉄器時代（前 1300 年頃～前 300 年頃）の例に類似する（Yule 2001）。

4. ワアブ

ブハ、グムダ、ティバートは、いずれも狭い海岸平野に立地する市街地の後背部に急峻な山地が迫り、谷の縁辺部や扇状地に周壁様の石積遺構が点在する（**図 3**）。現地の人はこれをワアブ（wa‘ab、複数形 awab）と呼ぶ。ワアブの語義は「テラス」であり、斜面地に構築されるテラス状の区画を指す。区画の大きさは数メートルから数十メートルまで多様であるが、上流側の石積には意図的に空隙や導水口が設けられており、下流側は下段の区画に通水する以外は石壁が堅牢に構

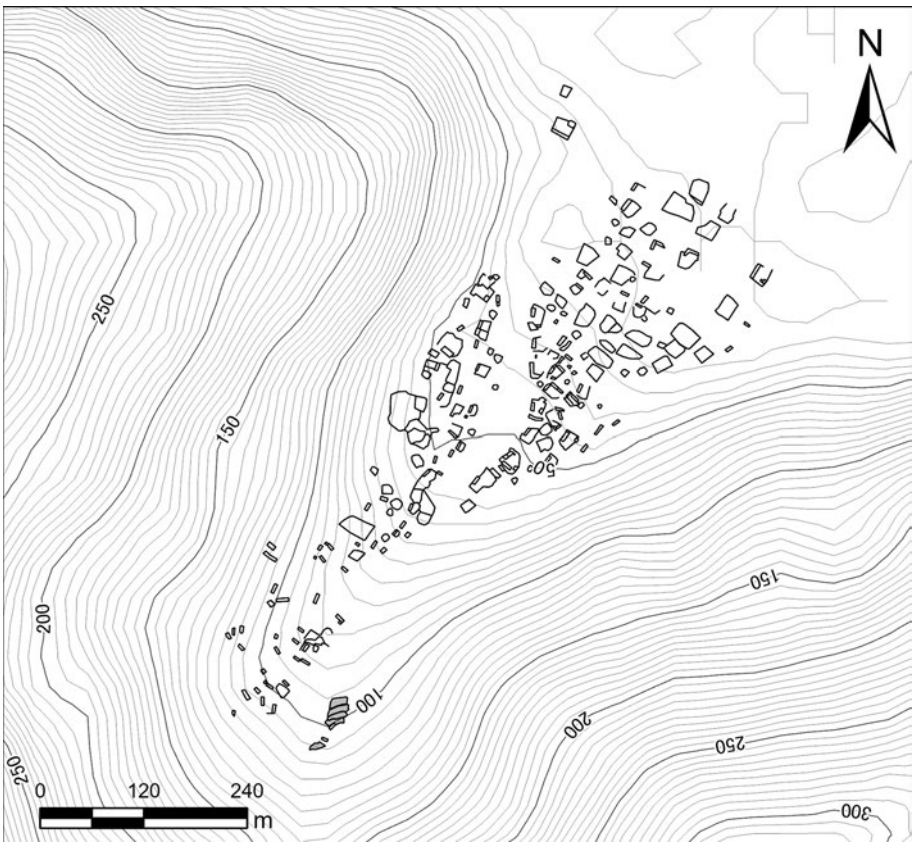

図4　ハラートゥ・ル＝ジャッダ遺跡平面図（田邉幹太郎作図）。ワアブ様遺構をグレー塗りで示す。

築されることから、降水時に表層をシート状に流れる洪水（sheet flood）を取り込む施設であることがわかる。区画の中央部にはシルトが堆積しており、水がたたえられていたことが分かる。現地の人に聞くと、ワアブではコムギやオオムギを栽培しているという。ムサンダム北部では、河川勾配が急で海岸までの距離が短小なのと、耕作地に使える平坦な土地が狭小なため、オマーン本土で一般的に見られる灌漑システム（ファラージュ falaj、複数形 aflaj）が見られず、季節的な降水をワアブに集めて湿地を作り、穀物を育てる農法が伝統的に行われてきた（Al Hatmi 2023）。ワアブの特徴と機能をより正確に理解することが今後の課題である。

5. ハラートゥ・ル＝ジャッダ集落遺跡

グムダの町外れに、広大な集落遺跡が存在するのを確認した。遺跡の名をハラートゥ・ル＝ジャッダ（Harat al-Jaddah）という。支谷沿いに約700 m続く大集落であり、多数の石積住居址を確認できた（**図4**）。どうやら上流側の「上の町」と下流側の「下の町」に分かれており、街路がめぐらされていることから、小都市であったと推定できる。上流では2つの涸れ谷（ワーディー）が合流しており、その近傍の斜面にワアブ様のテラスや墓地を確認した（**図5**）。現在の海岸線からは1.5 km以上離れていることから、港町であったとは考えにくいが、国境の南のラアス・ル＝ハイマは、イスラーム期にジュルファール（Jurfar）という地域名で知られており、ハレイラ島（Jazirat al-Hulayla）などに港町が存在したことも知られている（Sasaki and Sasaki 1996）。ハラートゥ・ル＝ジャッダも歴史に名のある町かもしれない。

図5　ハラートゥ・ル＝ジャッダ遺跡奥部から下流（北、出口）方向を望む（近藤康久が撮影したGoPro動画よりクリップ）。

6. むすびに代えて

ムサンダム北部の遺跡分布調査は端緒についたばかりであり、現時点ではわからないことだらけである。墓地とワアブの中には衛星画像で視認できるものもあるので、まずは衛星画像の判読により、地域全体で遺構の分布の全体像を把握した上で、今後数年をかけて、アクセスできるところから現地確認調査を実施してグランドトゥルースを取る。ハラートゥ・ル＝ジャッダ集落遺跡については、現地でのマッピングに引き続いて、遺物の表採ならびに住居址の試掘調査および炭化物の放射性炭素年代測定を通じて、集落の形成・存続・廃絶時期を明らかにしたい。そして調査成果をホルムズ海峡両岸の長期的文化変容の中に位置付けることにより、環オマーン世界、ひいてはインド洋海域世界（家島 2021）の文化交流史におけるムサンダム地方の位置を明らかにしていきたいと考えている。

本研究はオマーン遺産観光省の許可のもと、JSPS科研費JP20H00026、JP21H00605、JP24H00112、および人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「人新世に至る、モノを通した自然と人間の相互作用に関する研究」による助成を受けて実施した。現地調査にあたっては、査察官アリー・アッ＝シャーヒ氏ならびにムサンダム特別行政区遺産観光局の協力を得た。記して感謝申し上げる。

■参考文献

・Al Hatmi, S. 2023 *The Natural Heritage of Musandam*. Muscat, Ministry of Heritage and Tourism, Sultanate of Oman.
・de Cardi, B. and Doe, D. B. 1971 Archaeological Survey in the Northern Trucial States. *East and West* 21, 3/4, 225–289.
・Benz, M. 2013 Musandam and its trade with Iran. Regional linkages across the Strait of Hormuz. In: Wippel, S. (Ed.) *Regionalizing Oman: Political, Economic and Social Dynamics*, United Nations University Series on Regionalism 6, Springer, pp. 205–216.
・Genchi, F. 2023 The collective corridor-shaped tombs of the Daba Al Bayaah necropolis (Musandam, Oman): The origins and spread of a funerary structure based on evidence from Southeast Arabia. *The Journal of Oman Studies* 24, 19–46.
・Rose, J. I. 2008 Final Report on the Archaeological Survey in Northern Oman, 2008. Unpublished report submitted to the Ministry of Heritage and Culture, Sultanate of Oman.
・Sasaki, T. and Sasaki, H. 1996 1995 Excavations at Jazirat al-Hulayla, Ras al-Khaimah. Bulletin of Archaeology, The University of Kanazawa, 23, 37–178.
・Yule, P. A. 2001 *Die Gräberfelder in Samad al Shān (Sultanat Oman): Materialien zu einer Kulturgeschichte*. Rahden/Westf., Verlag Marie Leidorf.
・家島彦一　2021『インド洋海域世界の歴史　人の移動と交流のクロス・ロード』ちくま学芸文庫、筑摩書房。